

受動文における日・英語比較

松 倉 信 幸

Comparison of Japanese and English on Passives

Nobuyuki MATSUKURA

1. はじめに

日本語と英語の受動態をめぐる、まず問題になるのは態の不一致である。下記の例では英語では受動文であるのに、それと対応する日本語は能動文である。

- (1) a. 漁師はそのものすごく大きな魚にびっくりした。
b. The fisherman was very surprised at the huge fish.
- (2) a. 彼女は子供が誘拐されたことを知って大変なショックを受けた。
b. She was greatly shocked to know that her child had been kidnapped.
- (3) a. その土砂くずれで20人の死傷者がでた。
b. Twenty persons were killed or injured in the landslide.
- (4) a. 船は暗礁に乗り上げて難破した。
b. The ship was wrecked on the rocks.

日本語と英語において態の不一致が見られるのは、上記の(1)と(2)から感情を表す場合と、(3)と(4)から被害を表す場合とがあげられる。上記のように英語の受動文は感情や被害など、自分の意志ではなく、外からの影響で、ある状況になってしまった場合に用いられる。さらに、次の(5)と(6)の例では、日本語は受動文であるのに、英語は動詞の語用法上、能動文で用いられる。

- (5) a. その大会は高価なホテルで行われた。
b. The convention took place at an expensive hotel.
- (6) a. イギリスは高緯度に位置しているにもかかわらず、概して温和な気候に恵まれている。
b. Great Britain enjoys a temperate climate as a whole in spite of being located in high latitudes.

上記で日本語と英語における、態の不一致について取り上げたが、この相違は日・英語の受動文の特質の違いと考えられる。本稿ではこの日・英語の受動文について、それぞれの構造と機能について考察を進める。

2. 日・英語の受動文の形態

2. 1. 日本語受動文の形態

2. 1. 1. 直接受動文

日本語の受動態は、動詞＋「れる」「られる」の形で作られる。この「れる」「られる」は受動の意味に加え、自発、可能、そして尊敬も表すことがあるので複雑である。日本語には意味の上から、直接受動文と間接受動文の二種類の受動文があると言われる。能動文の「～を」が受動文の「～が」になるように、能動文と直接対応するものを直接受動文と呼び、対応する能動文のないものを間接受動文と呼ぶ。次に直接受動文の例をあげる。

(7) a. シマウマは(が)ライオンに襲われた。

b. ライオンは(が)シマウマを襲った。

(野田, 1991: 122)

(8) a. 犯人が警察に捕まえられた。

b. 警察が犯人を捕まえた。

上記の直接受動文は意味上、感情的に中立的表現であるので中立受動文とも呼ばれる。

2. 1. 2. 間接受動文

この間接受動文は意味上、被害受動文とも呼ばれ、能動文の目的語が受動文の主語に対応しない受動文である。次の(9)の例では、能動文の(9b)において、「～の～を」の「～の」が、受動文の「～が」になるというように、間接的に対応している(野田, 1991: 124)。また、(10)と(11)の例においても、間接的に能動文が受動文に対応している。さらに(12)と(13)の例においても、受動文の主語に能動文の所有を表す名詞句が対応しているため、この範疇に加えられる(井上, 1976: 80)。

(9) a. シマウマはハンターに足を銃で撃たれた。

b. ハンターはシマウマの足を銃で撃った。

c. *ハンターはシマウマを足を銃で撃った。

(10) a. 日本がドイツにマルクを引き上げられた。

b. ドイツがマルクを引き上げた。

(11) a. 組合は会社側に労務員との直接交渉を始められた。

b. 会社側が労務員との直接交渉を始めた。

(12) a. 私は先生に子供を叱られた。

b. 先生が私の子供を叱った。

(13) a. 太郎は次郎にペンを使われた。

b. 次郎が太郎のペンを使った。

2. 1. 3. 自動詞受動文

英語は他動詞の過去分詞を用いて受動文が作られるのであるが、日本語はしばしば自動詞を用いて受動文を作るのが特徴である。この自動詞の受動文は直接対応する能動文がないので、2. 1. 2. の間接受動文として分類される。次の例の「泣く」、「降る」は自動詞である。

(14) a. 太郎は、赤ん坊に泣かれた。

b. 赤ん坊が泣いた。

(15) a. われわれは、雨に降られた。

b. 雨が降った。

(井上. 1976: 79)

(16) a. われわれは、桐蔭に優勝されそうだ。

b. 桐蔭が優勝しそうだ。

(17) a. 太郎は次郎に成功された。

b. 次郎が成功した。

(*ibid.*: 80)

2. 2. 英語受動文の形態

2. 2. 1. 動作受動文

英語の受動態は‘be’＋他動詞の過去分詞によって作られ、意味上動作を表す動作受動態と状態を表す状態受動態の二つがあげられる。動作受動態と状態受動態の違いは、動作受動態は‘by’句を伴うが、状態受動態にはこれがない。また、状態受動態の過去分詞は形容詞化されていて、‘very’と共に起しているのも見られる。次にあげる例は動作受動文である。

(18) a. The president is elected by the citizens in the U.S.

(アメリカ合衆国では大統領は市民によって選ばれる。)

b. The citizens elect the president in the U.S.

(アメリカ合衆国では市民が 대통령を選ぶ。)

(19) a. The thieves have been caught.

(その泥棒たちは逮捕された。)

b. The police have caught the thieves.

(警官がその泥棒たちを逮捕した。)

2. 2. 2. 状態受動文

次の(20a)と(21a)の例は状態動詞の受動文であるが、それぞれ(20b)と(21b)に書き換えられることから、意味上、状態を表す。

(20) a. The door is closed already.

(ドアはすでにしまっていた。)

b. They have closed the door.

(彼らがドアをしめた。)

- (21) a. The bill was already paid.

(勘定はすでに支払われた。)

- b. They had paid the bill.

(彼らが勘定を支払った。)

(*ibid.*: 92)

また、受動文の過去分詞が同じであっても、動作受動態と状態受動態とに区別される。次の(22a)と(23a)は動作主を表す‘by’句があることから動作受動文である。もう一方の(22b)と(23b)は状態受動文である。

- (22) a. They were married by a missionary in Uganda.

(彼らはウガンダで宣教師に結婚式を執り行ってもらった。)

- b. They were married when they came back to Europe.

(Declerck, 1991: 201)

(彼らはヨーロッパに帰って来た時には結婚していた。)

- (23) a. The captain of the team was injured by his own goalkeeper.

(そのチームのキャプテンは味方のゴールキーパーに傷つけられた。)

- b. The captain of the team could not play because he was injured.

(*ibid.*: 202)

(そのチームのキャプテンはけがをしていたので、試合に出ることが出来なかった。)

2. 2. 3. Have+目的語+過去分詞

上記見出しの形態には使役と受動の意味がある。このことは形態上は異なるが日本語の「られ」, 「られる」にも意味上両方の意味が備わっていることと類似する。次の例は意味上、受動を表している。

- (24) I have my hair cut.

(私は散髪してもらった。)

- (25) I had my photo taken by him.

(私は彼に写真を撮ってもらった。)

2. 2. 4. 能動受動態

英語には形は能動態であるのに、意味の上から受動態ととらえられるものがある。次にあげる例は能動受動文である (Quirk, 1985: 744)。この受動態は形態上、自動詞であるので、英語にも日本語と同様に自動詞受動文の形態が見られる。

- (26) Her books translate well.

(彼女の本は上手に翻訳される。)

- (27) The sheets washed easily.

(そのシーツは簡単に洗えた。)

(28) The sentence reads clearly.

(その文ははっきり読める。)

(29) My shirts have dried very quickly.

(私のシャツはあっというまに乾いた。)

2. 2. 5. 態の転換によって意味も変わる場合

次の例のように数量詞を伴う名詞句の場合、受動文と能動文との間で意味の違いが生じる。下記の能動文ではいずれも、‘two languages’ は各人の知っている言語の組み合わせは不定で、二言語であれば何でもよく、もう一方の受動文では、組み合わせが決まっていて、特定の二言語を指している。このことから、英語の主題は意味上旧情報が位置し、その名詞句は特定化される。

(30) a. Many students in my class speak two languages.

(私のクラスの多くの学生は2か国語を話す。)

b. Two languages are spoken by many students in my class.

(2か国語が私のクラスの多くの学生によって話される。)

(31) a. Everybody knows two languages.

(みんなが2か国語を知っている。)

b. Two languages are known by everybody.

(2か国語はみんなが知っている。)

3. 受動文の情報構造

3. 1. 日本語受動文の情報構造

野田 (1991:133) は日本語において受動態が用いられる、次の3例をあげている。1) 動作主がわからなかったり、動作主を言いたくない場合 (32), 2) 前後の文と主語を一致させるために使う場合 (33), 3) 主節と従属節の主語を一致させるために使う場合 (34) である。

(32) a. また自転車が盗まれた。

b. まただれかが自転車を盗んだ。

(33) a. 私はおばあちゃん子です。母が働いていたので、私はずっとおばあちゃんに育てられました。

b. 私はおばあちゃん子です。母が働いていたので、おばあちゃんがずっと私を育てました。

(34) a. 課長は社長に呼ばれて、いま社長室に行っています。

b. 社長が課長を呼んで、課長はいま社長室に行っています。

上記の (32) では動作主が明示されていないが、(33) と (34) では動作主が明示されている

点が特徴である。

3. 2. 英語受動文の情報構造

Jespersen (1965: 167-168) は英語受動文を用いる次の5つの例をあげている。1) 動作主が不明または容易には表せない場合 (35), 2) 動作主が文脈から自明の場合 (36), 3) 動作主を表さない特別の理由がある場合 (37), 4) たとえ動作主が示されていても, 受動文の主語の方に関心がある場合 (38), 5) 受動文が文と文の結び付きを容易にする場合 (39) において, 受動態を用いる。

(35) He was killed in the Boer war.

(彼はボーア戦争で亡くなった。)

(36) She told me that her master had dismissed her. No reason had been assigned.

(彼女は雇い主に解雇されたと私に語った。理由は何も告げられなかった。)

(37) Enough has been said here of a subject which will be treated more fully in a subsequent chapter.

(この問題は後の章でもっと詳しく扱うので, ここではこのくらいで十分である。)

(38) The house was struck by lightning.

(その家は落雷にあった。)

(39) He rose to speak and was listened to with enthusiasm by the great crowd present.

(彼が立ち上がって話すと, 居合わせた群衆は熱心に耳を傾けた。)

上記の Jespersen の5つの指摘のうち, 1から3までが動作主が明示されない場合である。英語ではこの 'by' + 動作主が省略されるのが一般的である。Quirk *et al.* (1972) は受動文の5例中4例まで省略すると述べている。また, 福村 (1965) は英米の著名な作家及び評論家の作品について調査した結果, Passive Voice 158例のうち動作主が示されていたのは23例足らずで約15%であった。このように英語の受動文は動作を受けた対象とその動作だけが表現される構文と考えられる。さらに, Declerck (1991) は受動文が用いられる例を6つあげているが, そのうち5つまでが Jespersen の例とほぼ同じであるので, ここに第6例を取り上げる。6) 話し手の重い (長いか複雑な) 名詞句を文末に置こうとする傾向の結果, 受動態が用いられる。

(40) I was surprised by John's decision to join the army.

(私は軍に入隊するというジョンの決意に驚いた。)

4. 受動文の制約

4. 1. 日本語受動文の主語の制約

日本語の受動文では、主語は動作を受ける対象であるため有生名詞句が好まれる。しかし、受動文の主語が対応する能動文の直接目的語の場合には、次の例のように人間の活動を表す名詞句が受動文の主語に置かれる。

(41) 最終提案が首相の裁断で決められた。

(42) 会談が日本時間の16日早朝に予定されている。

(43) 19日に閉会式が行われる。 (井上, 1976; 77)

下記の非人称主語の日本語受動文は、いわば欧文調のもので歴史的にも西洋の影響を受けたものであると言われている (安西, 1981: 180-181)。

(44) The first modern Olympic games were held in Athens in 1896. Since then the games have been held every four years, except during the wars, in the principal cities of the world.

(最初の近代オリンピックは、1896年アテネで開かれた。それ以来、戦争中は別として、四年ごとに世界の主要都市で開かれている。)

さらに受動文に対応する能動文の主語、すなわち受動文の補文の制約について、井上 (1976) は有生名詞句か、人間の集団を表す名詞句か、自然現象または機械のように [+動的] の特徴を持った名詞句でなければならないと述べている。

(45) 僕は隣の犬にほえ立てられた。

(46) 太郎は電車にひかれた。

(47) 花子は子供にぶつかられた。

(48) *花子はボールにぶつかられた。

(49) *太郎は庭木に茂られて困っている。

4. 2. 英語受動文の主語の制約

英語受動文の容認可能性を意味論の観点から考察した Bolinger (1975: 68-69) によれば、受動文の主語は真に動作の影響を受ける客体 (true patient) でなければならないと考える。

(50) a. The bridge has been walked under by generations of lovers.

(その橋のたもとを幾世代もの恋人たちが通って行った。)

b. *The bridge has been walked under by the dog.

(その橋の下を犬が通った。)

(51) a. This lake is not to be camped beside by anybody!

(この湖の近くでは誰もキャンプをしてはならない!)

b. *The lake was camped beside by my sister.

(その湖の近くで私の妹がキャンプした。)

(52) a. The army was deserted by its commander-in-chief.

(その軍隊は最高指揮官に見捨てられた。)

b. *The army was deserted by John.

(その軍隊はジョンによって見捨てられた。)

上記の例で問題となるのは、動作主によって主語が影響を受けるか、受けないかである。上記の(50b)の‘the dog’, (51b)の‘my sister’, そして(52b)の‘John’では主語は何ら影響を受けることはないので容認されない。しかし、(50a)では動作主として多数の人々が考えられるので容認され、(51a)では不特定多数の者がキャンプをすることで湖に被害をもたらすと考えられるため容認される。また(52a)では動作主が最高指揮官であるので、その影響力により容認される。上記のように Bolinger は受動文を主語への影響を述べる文と考えている。もう一方で Cureton (1979: 42) は ‘The Implied Quality Predication Hypothesis’ という仮説によって、能動文における目的語の名詞句について、何らかの重要な特性が推論出来る場合に、能動文に対応する受動文が可能であると考ええる。

(53) Mary is loved by John.

(54) John is disliked by Lucy.

(56) New York can be reached in two hours.

(ニューヨークは2時間で行ける。)

(57) A mile can't be run in four minutes.

(1マイルは4分では走れない。)

上記で述べた Bolinger (1975) と Cureton (1979) の指摘は、英語受動文が動作と状態を表すことを考えると、Bolinger の指摘は動作受動文に、Cureton の指摘は状態動詞に対して有効である。

5. おわりに

本稿では日本語と英語の受動文について、それぞれの構造と受動文が形成される機能、そして受動化への制約について述べてきた。以上のことがらは次のようにまとめられる。

1. 日本語受動文には直接受動文と、能動文の目的語が受動文の主語に対応しない間接受動文の形態がある。
2. 英語受動文には動作受動文、状態受動文、Have+目的語+過去分詞、そして能動受動文の形態がある。
3. 受動文の情報構造及び機能について日本語と英語に共通な点は、①受動文は動作主が不明であったり、表したくない場合に用いる。②前後の文脈から、統語上、文と文の結び付きを容易にする上で用いる場合の2つが上げられる。

4. 日本語受動文では、主語には主に有生名詞（句）が用いられ、受動文の補文についてもほぼこれと同様な制約が見られる。
5. 英語受動文では、有生名詞句に加えて日本語よりも無生名詞が主語に置かれる場合が多く、この影響は日本語への翻訳において見られる。

〈参考文献〉

- 安西徹雄. (1983). 『英語の発想 翻訳の現場から』. 講談社.
- Bolinger, D. (1975). "On the passive in English." LACUS1, 57-80.
- Cureton, R. D. (1979). "The Exceptions to Passive in English: A Pragmatic Hypothesis." SLS9, 39-53.
- Declerck, R. (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- 福村虎治郎. (1965). 『英語態 (Voice) の研究』. 北星堂書店.
- _____. (1988). 「他動詞と態」. 『英語語彙の諸相』: 93-109. 研究社.
- 井上和子. (1976). 『変形文法と日本語・上』. 大修館書店.
- Jespersen, O. (1933). *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin.
- _____. (1965). *The Philosophy of Grammar*. W. W. Norton & Company Inc.
- 金田一春彦. (1988). 『日本語・下』. 岩波書店.
- 小寺茂明. (1989). 『日英語の対比で教える英作文』. 大修館書店.
- 松倉信幸. (1990). 「VOICE の情報構造と主題について」. 八王子英文学論叢第1号: 35-50.
- 村木新次郎. (1991). 『日本語動詞の諸相』. ひつじ書房.
- 村田勇三郎. (1982). 『機能英文法』. 大修館書店.
- 野田尚史. (1991). 『はじめての人の日本語文法』. くろしお出版.
- Quirk, R. S. Greenbaum, G. Leech, & J. Svartvik. (1972). *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- _____. S. Greenbaum, G. Leech, & J. Svartvik. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 鈴木雅光. (1994). 「日・英の受動表現」. 東洋大学短期大学英文学科論集 No. 16: 65-80.
- 寺村秀夫. (1982). 『日本語のシンタックスと意味 第1巻』. くろしお出版.